堕ちた魔女

aiiaiai

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

堕ちた魔女

【Nコード】

N6726K

【作者名】

aiaiaiai

【あらすじ】

対立した二人の神。一人の神、バルバドスは、もう一人の神、フレイヤを神界から突き落としてしまう。神力を奪われ、追放されたフレイヤは、地上で新たな力である魔力を生み出した。バルバドスは唯一神と名乗り、未だ生きているフレイヤを悪魔とした。

二人の神々の悲しい運命を、亡くなった女神は見守る。果たしてどちらが正しいのだろうか。神々との決別の戦に、アデルは巻き込まれていく。

第一話 アデルの出会い（前書き）

初めまして。この度、この作品を書かせていただき、f u w aと申します。あまり文才はないのですが、皆さまに楽しく読んでもらえるよう、努力したいと思います。

誤字脱字やおかしい処がありましたら、是非伝えてくれると嬉しいです。

更新は不定期ですが、しっかり書き上げていきたいです。

又、短い！とか、分かりにくい！とか、あるかもしれませんが。作品の長さは統一されていません。皆さまの声に合わせて改善していきたいです。

では、これからもよろしく願いいたします！

第一話 アデルの出会い

昔、世界には一人の女神が居ました。女神は、この世界の生命を、大地を、理を作り、やがて子供を二人産みました。

二人の子供は女神の神力を受け継ぎ、とても強大な存在になりました。しかし、神には一人しかなれませんでした。

二人の子供は互いを陥れ、神の座から引き？がそうとしました。そしてついに、二人の子供のうちの一人が、もう一人を神界から突き落とすてしまいました。

突き落とされた神は穢れ、神力を失いました。

神界に残った神は、自らを唯一神と名乗り、多くの生命に自らの存在を知らしめました。後に子供を作り、親族を増やしていきました。突き落とされ、神力を失くした神は、神力の代わりに、魔力という力を生み出しました。魔力は、地上のあらゆるものを魔力によって操る、又は生み出す術でした。そうした魔術は、地上の奥の人間や精霊といった、知能のある者に親しまれ、普及していきました。

魔術の普及により、唯一神である自分を敬う者が減っていく事を、神は許しませんでした。神は、突き落とされたもう一人の神を悪魔としました。そうすることで、魔術は禁忌とし、再び我が神力を求めさせようとしたのです。

目論見通り、悪魔とされた神は全ての者たちから恐怖され、姿を消しました。

そして神は、悪魔と、悪魔に付く者達をまとめて、亜空間へ追放してしまいました。後に、悪魔は恐怖されながらも、架空の存在とされるまで認識が薄れて行きました。

亜空間に追放された悪魔たちは、当然神力がないので、何もすることができませんでした。無限に広がる空間で、ただただ藻掻いていました。見かねた女神は、神に内緒で彼らに、新しい世界を与えま

した。そして、神にはれない様に、悪魔たちに新しい姿を与えました。

悪魔は艶やかな黒い髪と眼をした美しい女性の姿になり、他の者も皆、黒い髪と眼をもった姿に変わりました。その全てを吸い込んでしまいそんな黒には、膨大な魔力が秘められていました。黒い髪は魔力のある証でした。

女神は、唯一神にバレてしまわない様に、悪魔たちに目立つ行動を禁じ、悪魔を、魔女と名乗らせました。

女神が悪魔を逃がしたことを知った神は、激怒しました。そして、自らの神力で女神を殺してしまいました。女神は死ぬ直前、数滴の涙を流しました。その涙は、亜空間で大きくなり、やがて世界になって行きました。魔女がどこにいるか分からなくするためです。

(どうか、あの子たちに幸せが訪れますように……………)

そして、神は全ての世界に自分の存在を知らしめ、奉らせ、見つけれられずとも、悪魔たちの居場所を失くしていきました。

「はい、アデル君。次のページ読んでください。」

半分寝かかっていたアデルは、慌てて教科書を手に取り、指定されたページを読んだ。

「はい。えーと……唯一神率いる神族は、邪な力を持った悪魔達と勇敢に戦いました。悪魔達は、僕たち人間を人質にしたりする卑怯な輩でしたが、唯一神は屈せず立ち向かい、犠牲者をほとんど出さずに悪魔達を退けました。」

「はい、良く出来ましたね。」

ふう。と安堵の息を漏らすアデル。冒険好きのアデルは、毎日近くの洞窟を歩きまわっている。そのせいか、疲れが溜まって、授業中寝てしまうのだ。

アデルは、神様の勉強は嫌いだ。勉強ができた訳ではないが、神様の勉強は、聞いてて面白くないのだ。だって、悪魔達と戦ったという功績を強調しすぎなのである。他にもいろいろあるが、どれも子供っぽい強調だった。こんなのが唯一神か、と心の中でほくそ笑む。

アデルは悪魔に興味があった。何故神族にああも敵にされているのか。本当に人間を人質にするような卑怯な輩なのか。魔術とはどんな物なのか。

洞窟探索もその気持ちからきている。アデルは幼いころ、あの洞窟で迷子になった。光も差し込まない暗い洞窟は、持っているランプだけでは頼りなく、灯も消えかかっていた。

ランプが消えれば魔物に襲いかかれるかもしれない。という不安が、アデルの足を竦ませていた。

そんな中、洞窟の奥から一人の綺麗な女の人が自分に歩み寄ってきた。

「大丈夫。外に連れて行ってあげる。」

この世ばかりか、他の世界の人でも有り得ない、黒い髪と、眼をしていた。とても美しい顔立ちで、艶やかな髪と、吸い込まれそうな黒い眼にドキツとした。

女の人は優しく微笑むと、手を握って歩きだした。女の人が、もう一方の手を前にかざしたと思ったら、その手が淡く光った。

それが何だったのかは分からなかったけど、淡い光だったのに、辺りを見渡せて、自分の不安を拭ってくれた。とても温かい光だった。魔物も寄ってこなかった。

洞窟の先に光があり、出口があることを示していた。ここまでくれば魔物は来ない。お礼を言おうと女の人を見ると、彼女は微笑み、洞窟の中へ戻って行った。

「待つて！」と言おうとしたが、村の人たちに保護され、女の方は暗闇に消えて行ってしまった。

今思えば、あれが魔術だったのかも知れない。自分の知る神術や、精霊術には、あんな物はなかったはずだ。だとしたら、どうしてあんな温かくて優しい光が、邪な術をされていて、あまつさえ禁忌なのだろうか。アデルにはそれが不思議でならなかった。

魔女たちは、ある洞窟に身を隠していた。四つある世界の中で、この洞窟は一つだった。というのは、この洞窟から全ての世界へ行けるし、全ての世界からこの洞窟は共通のものだからだ。とても広大なこの洞窟を開拓しようと、今まで数多の人間や精霊が入ってきたが、数少ない同胞のうちの一人が、それ等を全て追い払ってしまった。

魔女は、フレイヤは、そんな事をする必要はないと否定したが、我々の存在を唯一神に知られてはいけないからと、フレイヤの言うことを聞かなかった。

同胞達は二つに分かれた。フレイヤと、フレイヤの意見に賛成するレイドという男。そして、人間や精霊を追い払っていたギムという魔法使いと、その意見に賛成するクラッドとランディ。

互いは傷つけあったりはしなかったものの、お互いに干渉はしなかった。フレイヤもギムの考えには一理も二理もある。このまま人間や精霊に見つかって、唯一神であるバルバドスに見つかってしまったら、母の愛を無駄にしてしまうことになる。ギムも、女神を愛していたのだ。

だが、ギムは自らの魔力で動物を凶暴化させ、番犬のようにしている。人間や精霊に死者や負傷者が出てしまっているのだ。こんなことを続ければ、私たちは本当に悪魔になってしまう。フレイヤの考えを、ギムも分かっていた。だが、こうするしかないのだと嘆く。互いに意見を変える様子はないので、溝は埋まることはなかった。

ある日、一人の子供が洞窟内を立ち往生していた。手に持った、魔物を寄せ付けない神聖なランプの灯が消えかかっている。足を震えさせ、辺りをキョロキョロと見回している。

フレイヤはゆっくり歩み寄ると、少年と目が合った。最初は驚いて

いたが、少年の顔は次第に安堵に染まり、可愛く笑った。
人間や精霊は母の子供たち。フレイヤには彼らがとても愛おしく思えた。例え自らを陥れたバルバドスを崇めていても、フレイヤには彼らが愛しかった。

フレイヤは、バルバドスのことをあまり怨んではいなかった。考えてみれば、彼を陥れようとしたことだってある。もしかしたら、私が彼を神界から突き落としていたかもしれないのだ。そう思うと、彼を恨むのはお門違いに思えてきた。

フレイヤは、少年に微笑み返し、出口へと送った。寒くない様に魔術で彼を包み、洞窟内を見渡せるように光を照らした。

ギムの作った魔物は、フレイヤや同胞たちには手を出さない。なので、少年を無事外に送ることができた。

少年の姿を確認したのか、村人が此方へ向かってくる。さすがに見つかってはいけないと、私は洞窟内へ戻った。

「アデル！」

ピンクを基調とした、フリフリの可愛らしいドレスを着た女の子が走ってくる。アデルはそれを見て、げんなりとした。

少女は、腰に手を当てて、どう？似合う？と自分のドレスをアピー

ルした。このドレスは、母に買ってもらったお気に入りなのだ。一番最初にアデルに見せてやりたかった。

「カレン…………お前な、今から洞窟に行くんだぞ？そんな恰好でどうするつもりだ。」

中には魔物だっているし、そんなんじゃ歩きにくいだろう？」「
言うと、カレンは仏頂面になった。

「分かったわよ…………着替えてくるわよ。待ってなさいよ！」

そう言っ、カレンは渋谷家に戻って行った。戻る途中、ドレスに足が引っ掛かって転んでいた。

「やれやれ…………とんだお姫様だ。」

アデルは頭を抱えた。

学校が終わり、今日から長期休暇だ。その間に出た宿題の中に、絵日記が合ったので、アデルはこの洞窟のことを書こうと決めた。運が良ければ、またあの綺麗な人に会えるかもしれない。そう思っ
てのことだ。

カレンと一緒にやろうと言ってきたので連れていく。女の子にこんなことさせるのは危ないが、彼女は男勝りの怪力だ。俺もスポーツでは勝てない。

「アデル！」

向こうから、今度はラフな格好をしたカレンが走ってくる。濃い藍色のその髪は、仄かにあの女の人を思い起こさせる。だけど、間近で見ると、やっぱりカレンはカレンだった。
アデルはため息をつく。

「何よ！レディの前でため息なんて、失礼じゃなくて!？」

第一話 アデルの出会い（後書き）

フレイヤは悪魔と呼ぶにはあまりに純粹です。

ギムやほかの同胞たちも、とても良い人ばかりです。ですが、ギムはみんなを守るためにバルバドスを殺す決意があります。

バルバドスという名前の由来は、強そうで傲慢で敵かな奴を思い浮かべたら、昔やったゲームにこんな名前の人がいた気がするので、勝手に使わせていただいております。

申し訳ございません。

第二話 フレイヤとギム（前書き）

しばらくバルバドスさんの視点はないかもしれませんが。まだ、バルバドスをどういった考え方の奴にするか決めてないからです（笑）
悪者にしようかな……？

第二話 フレイヤとギム

アデル達は順調に洞窟内を進んで行った。特にアデルは、迷った時の経験から、準備も怠っていない。お小遣いをためて、大きめのランプを買ったのだ。これで、大抵の魔物は近づけないだろう。ただ、ランプには欠点があった。神力を光としてまき散らすランプは、魔物こそ近づけさせないが、自らの位置を知らせるようなものなのだ。つまり、ランプが切れる前に洞窟を出なければならぬ。燃料の換えは持ってきているが、それでも限りはある。

(あの人に会えるかな……………)

「アデル！」

私は、この日のために買ったドレスを着て行った。洞窟に行くから動きやすい恰好をしなきゃいけないのは分かってたけど、どうしてもアデルに見せたかったのだ。

アデルは苦笑いしながら、着替えてこいといった。いつものように憎まれ口を叩きながら、私は走って家に戻った。

ドレスを見せることができた。それだけでとても嬉しかった。途中、ドレスに引っかけたかかって転んでも、私は笑顔だった。

……私はアデルのことが好き。

でも、アデルは好きな人がいるみたいだった。丁度、アデルが洞窟で行方不明になって、無事に戻ってきてから、アデルは誰かを追うように洞窟に入り浸っている。聞いたところ、綺麗な女の人がアデルを洞窟の外まで連れて行ってくれたのだそうだ。

そんなことは有り得ない。だって、この洞窟には魔物しかいないのだから。もし、他に居るとするなら、悪魔……？それとも、魔女……？

「カレン」

アデルと呼ばれ、ボーっとしていたことに気づく。アデルのことを考えると、どうしてもこんなのだ。

アデルは最近私と視線を合わせない。私の目より少し視線を上げて、私の髪を見ている。

髪が好きなのかしら……？

ここだ。ここで俺は迷っていたんだ。

アデルは今、自分が迷って立ち往生し、助けられた場所に居る。あの日から、アデルにはこの洞窟の構造が分かるようになっていた。それがあの女性のおかげなのか、それとも俺がこの洞窟に認められたのか、はたまたただの偶然か、それは分からない。でも、どれにしても便利なことだ。

わかれ道の端にジリジリと動く影がある。多分、魔物だろう。ランプがあるから動けないのだ。もう少し進んでみよう。もしかしたら、この先にあの人がいるかもしれない。まだまだランプの燃料は余裕がある。

ドオン

アデルがそう思った直後、地響きが起こった。

ドオン ドオン

この洞窟で地震なんて起きたことはない。それに、この一定のリズム……………。まるで、巨人が歩いてるみたい……………。まさか！足音……………なのか！？

ドオン ドオン ドオン ドオン

足音は、すぐそこまで来た。俺等が来た道から、ヒョイと顔のない巨人が姿を現した。体表は黒い。あれは、あれは、

「カレン！あれは魔物だ！このランプじゃ近づいてくる、逃げる！」

俺とカレンは思い切り走り抜けた。あの巨大な魔物、でかい割にはかなり早い……………！このままじゃ、追いつかれる！

落ちつけ、落ち着いて考えるんだ。何故アイツは顔がないのに、俺等を追うことができる……………？どこかに目があるのか、それとも、何か触覚のようなもので俺等を感じているのか……………？だとしたら、何を？

そうだ！ランプだ！これを消せば、アイツは俺たちを追って来れないはずだ！

「アデル！消しちゃダメ！」

カレンの声で俺はランプを消すのをやめる。カレンは続けざまに、足音に邪魔されないように大きな声で叫んだ。

「それを消したら、きつとあの男も追って来れないでしょうけど、それだと魔物が来ちゃうわ！きつと、魔物たちはそれが目的なのよ！」

そうか……………そうだった。ランプを消せば、ランプで近づけない魔物がやってくる。クソッ、詰んでるじゃないか！

魔物にそんな戦略的思考が出来たのか？否、出来るわけがない。となると、答えは一つ。

魔物を動かしている奴がいる……………！

ふと、あの女性のことが頭に浮かんで、アデルは頭を振った。

そんなことは有り得ない。あんなに優しい人が、俺たちを殺すようなことを、するはずがない！

とりあえず、現状をどうにかするしかない。

「カレン、消すぞ！」

「え！？何言ってるの？消したら……」

「そんなことは分かってる！だけど、あんな巨人に潰されちゃお終いだ。弱い魔物と戦う方が、生き残れる可能性があるんだ！」

カレンが覚悟を決めたように頷く。それを合図に、俺はランプを消した。同時に、辺りが暗闇に包まれ、後ろで巨人が雄たけびを上げている。

暗闇に慣れた目で見ると、予想通り後ろから魔物が追いかけてくる。巨人と違って犬のような魔物なのだが、案外スピードはない。これなら……！！

「キャッ！」

「カレン！」

カレンが転んだ。この暗闇じゃ、足元も見えない。クソっ……………！！このままじゃ、カレンもオレも、死んじまう！

そう思った時だった。

辺りが淡い光によって光った。おかげで視力の戻った俺は、見覚えのある人を見つけた。あの時の、あの人だった。

彼女はカレンに近づくと、カレンの足に手をかざした。転んで擦り剥いたらしい所が、だんだん塞がっていく。

次いで、彼女は魔物に近づいていった。危ない！と声をかけようとしたのだが、喉が枯れてうまく声が出せなかった。

彼女は、魔物を抱き、頭を撫でた。

「あの人たちを許してあげて。」

彼女がそう言うと、魔物は満足そうに鳴いて、暗闇の中に姿を消した。

「あ、の……時、の……！」

ようやく出せた声。ちゃんと伝わったか心配だったが、彼女は此方を見て微笑んでくれた。その微笑みは、この間のものと同じ、優しく、どこか寂しそうな微笑み。

「この前の子ね。ここは危ないから、この娘を連れて早く帰った方がいいよ。」

自分のことを言われたカレンは一瞬肩を震わせたが、黒い髪の人を怪しむように睨んでいる。

「貴女、何者なの……？」

そういうと、黒い髪の方はカレンの方を向いた。そして近づき、カレンの前にしゃがみこんだ。

「私は、フレイヤ。ここに住んでるの。それだけ。」

そう言っつて、フレイヤと名乗った女性は立ちあがった。そして、暗闇の向こうを見つめる。

何かあるのかと、俺も向こうを見つめるが、暗闇しか見えない。すると、向こうから声がした。

「フレイヤ……。何故人間を助ける。自分の名を明かしてまで、女神の子が愛しいか？」

フレイヤの発する光があたるところまで来た声の主は、フレイヤと同じ黒い髪に黒い瞳の、二十歳くらいのローブを被った男だった。

「ギム、私は、彼らを殺してしまうのはどうかと思う。私たちと同じく、母から生まれたのだから。」

「しかしな、奴らはバルバドスを崇めている。我らの存在が唯一神に知れば、それこそ母の努力は無駄になってしまう。お前の気持ちも分かるが、もう少し、非常になれ……。フレイヤ。お前は優しすぎるのだ。」

俺とカレンは、ただ二人を見ていた。唯一神、バルバドス様を、彼らは嫌っているようだった。だとすれば彼らは、もしかや悪魔なのだろうか？フレイヤは魔女なのだろうか？

「バルバドスも、きっとこの洞窟は突き止めているはず。確信はないだろうけど、私たちが生きながらえていることを、彼は知っている。」

ギムという男は顔を顰めた。

「やはり、バレているのか。確信がないというのが救いだが……。まあ、お前のおかげでバルバドス等は此处に近づくことさえ出来ないだろうがな。」

いい加減、我らと一緒にバルバドスを討たぬか、フレイヤ。もう、隠れて生きるのは疲れた。お前が協力してくれれば、きつと……！」

「……………」

フレイヤは、答えなかった。

「お前はやはり優しすぎる。我らがバルバドスに殺されてしまうのを恐れているのだろう。だがな、フレイヤ。恐れるだけでは、何も手に入らんぞ。……その人間はお前に免じて見逃すが、もう二度と来るなよ。」

俺とカレンはいきなり話を振られ、肩を震わせた。フンツと鼻を鳴らしてギムが帰って行った。

腰を抜かしている俺に、フレイヤが近づいてきた。

「さあ、赦してくれるらしいから、もう大丈夫だよ。家へお帰り。」

嫌だ。フレイヤに聞きたい事が山ほどある。フレイヤに見せたい物もたくさんある。フレイヤともっと話していたい。

……そして俺は気を失った。

第三話 神族のマリー

ここはどこだろう？

辺り一面に広がる白い花。隙間なく咲くその花達は、さながら白い絨毯のようだった。その絨毯の上に、黒い髪と眼を持った、美しい女性……………フレイヤがいた。

フレイヤは此方に気づき、微笑む。その微笑みはやはり優しく、悲しみを帯びていた。

白く透き通る彼女の肢体に不釣り合いなボロボロの布切れは、逆に彼女の神秘的な魅力を引き立てていた。

フレイヤ！

名前を呼んでも、彼女は微笑んでいるだけ。

近づこうとすると、白い花たちが足に絡んで動けなくなる。目の前に何年も待ち焦がれた存在が在るのに、手に入れることが出来ない。

「アデル」

俺を呼ぶ声が聞こえる。だがその声は、昨日聞いたフレイヤの澄み切った声ではなかった。

……………目を開けた。というか、今の今までフレイヤの存在を見失うまいと目を見張っていたというのに。夢とは思えない不思議な感覚だとつくづく思う。

明るみに慣れ、まぶたを完全に開くと、目の前にカレンがいた。俺が目覚めたことで安心したのだろうか、安堵のため息を漏らすカレン。カレンのズボンが破れた跡と、傷がない脚を見て、アレが夢ではなかったことを確信し、俺も安堵する。

「にしても、何者だったのかしらね……、あの人たち。フレイヤ
つて人は、アデルの言つてた人でしょ？じゃああのギムつて人は、
誰なんだろう？バルバドス様の話をしていたようだけど、良く聞こ
えなかったわ……。あまりいい雰囲気じゃなさそうだったけど。」
まったくその通りだ。彼らは、バルバドス様に敵対している。だと
すれば、やはり彼らは悪魔で、魔族だ。そして、あの温かい光も魔
術という物だろう。

やはり、神様は嫌いだ。どうしてフレイヤを、あんなに優しい人を
悪魔などと……。あの魔術だって、神術や精霊術に並ぶ、いやもし
かしたら、それ以上の力を発揮するかもしれないのだ。

神術とは、バルバドス等神族の恩恵を受け、その神力を物や人に宿
し、その力を行使するものだ。物に宿すのは簡単で、神術を用いた
ランプなどを始め、多くの生活必需品には神力が宿っている。しか
し、その力は微力で、長持ちもしない。

人に宿す場合は物と違って、才能に比例するが 膨大な力を
発揮し、長持ちもする。ただしこの場合、心が穢れてはいけな
い。なので、奴隷や貧しい民の中に、才あるものを見つけては、気
絶させて神力を注ぎ勝手に行使するということが、この国では許さ
れている。国に貢献するためと、触媒にされる者の家族には少しの
金を与え、黙らせているのだ。

精霊術は、この世に居る精霊達の力を借りる術である。精霊はどこ
にでもいるので、気に入られれば簡単に力を使うことができる。も
つとも、精霊と干渉する術を持っていなければどうにもならないが。
精霊術を学ぶことができるのは、財のあるごく一部の貴族や、王族

などである。子供のような独占欲が、精霊術の普及を遮っている。中には純粹に精霊に気に入られ、身に降りかかる危険から守られている者もいるが。

アデルは授業で教わったことを思い起こす。どちらの術も、共通の欠点はある。それは、使用にかなりの時間がかかることだ。神力を具現化したり、精霊に干渉したりする間は、あまりに無防備。それなのに、フレイヤは一瞬で魔術を行使した。そして、ギムの一
言。

” お前のおかげで、バルバドスたちは此処に近づけもしない”

神々をも寄せ付けない能力……。なんか、かなり興味がわいてきたぞ……………！

「カレン、旅に出よう。」

「フレイヤ、ここにいたか！」

ギムとよく似た、しかしギムより若い男が、フレイヤに向かって走ってくる。

「レイド……………」

レイドと呼ばれた男、実は、ギムの弟である。彼は、ギムのやり方に反発し、フレイヤの味方に付いていた。

「……………兄貴と話したのか。」

レイドは、ギムの気配を目敏く見つける。多分、私の目が語っていたのだらう。私は今、どんな顔をしているのかな。きつと、ひどく見つともない顔をしていると思う。

「フレイヤ、震えてる。」

レイドは背中から手を回し、私を優しく包み込んでくれた。温かい彼の身体が、震えの止まらない私の体を落ち着かせてくれる。

久しぶりにギムと話した。とても怖かったし、ギムの力になれないことが悔しかった。それに、見限られたかもしれないと思うと、どうしようもなく胸が締め付けられる思いがした。

「なあフレイヤ……………俺ならフレイヤにそんな思いさせない。兄貴なんかに、フレイヤはもつたないよ……………」

何回目だらうか……………。こうやって見苦しく泣いて、レイドに気を使わせてしまうのは。そのたび、レイドは優しくしてくれるのに。ギムへの思いが、レイドに移ることはなかった。

それが、どうしても失礼なことだと思えて、レイドにまで見捨てられるのかと思うと、悲しくて、たまらず私は泣き出してしまふ。

無言で涙をこぼす私を見て、レイドはため息をこぼす。きつと、否定の意味だと受け取ったのだらう。それがいいことなのか悪い事なのかは分からない。ただただ、悲しい。

「あら、情報が早いわね。……そうよ、お父様はここと、あとグラニーの世界の遺跡に目を付けているわ。まあ、グラニーの方はすぐ何もないと分かるでしょうけど。ここが拠点だとバレルのも時間の問題よ。尤も、フレイヤの力で近づけないでしょうけど。」

グラニーとは、四つある世界のうちの、二つ目の世界、ミッドラルの支配神である。因みにメリーは四つ目の世界、デイラカンダの支配神である。母が作った四つの世界に、バルバドスは自らの子供を置いている。我らの居場所を無くすためだろう。

メリーはバルバドスのことをあまり好いてはいない。なので、デイラカンダの民はあまり神を崇めていない。

そんな我らに無害な彼女だから、こうして洞窟に入っただけだが……。

「いつまでもフレイヤに頼ってはいけないだろう。時が来れば、バルバドスに戦を仕掛ける。戦力はないがな、何も出来ずに死んでいくよりはマシだ。」

そこまで言うと、メリーは真顔になった。何故フレイヤに頼ってはいけないのか、何故バルバドスと戦う必要があるのか、と私を宥めるのに必死だ。

「まあいざとなれば、私も協力してあげるけど、……このまま戦いを挑んでも無謀というモノよ？そんなことして、フレイヤが、お母様が喜ぶと思う？」

「……………」

「私はお母様に会ったことはないけれど、きっと優しい方だと思う。」

フレイヤがあんなに優しいんだから、きつとね。貴方達をお父様から逃がしたのがお母様なら、貴方が戦って死ぬなんて事、望まないはずよ……。」

それでも、後戻りはできないのだ。この溢れ出る負の感情を奴にぶつけないければ、私の気が済むことはないだろう。

「カレン、とりあえずトークスに行こう。」

トークスとは、第三の世界とされる世界である、神術の研究が盛んで、もつとも神を崇める世界である。

「トークスに行つてどうするの？神術でも学ぶの？」

「いや、トークスへは神界の勉強をしに行く。奴らの情報をいつぱい持っていれば、きつとフレイヤの力になれるはずだ。」

そうすれば、きつと俺も受け入れられるだろう。そすつれば、俺だつてフレイヤに頼られるかもしれないのだ。

きつと彼女等は外に出られないから、今の世界の情勢や神界の様子

が分からないんだ。それを知る術を与えれば、フレイヤは笑ってくれるかもしれない。悲しみを帯びていない、幸せな笑みを浮かべてくれるかもしれない。

「さあ行こう、カレン！」

「まったくアナタって人は……」

意気込むアデルに呆れつつも、彼を守ってやるうと心に誓うカレンだった。

第三話 神族のマリー（後書き）

トークスを支配している神はレセルウスという神です。

バルバドスを尊敬していて、人間以上にバルバドスを崇めています。神が神を崇めるのもおかしい話ですが……（笑）

ところで、この作品には宗教はあまりないことにしたいです。宗教について勉強するのは面倒ですし、一々宗教の内容を書いていたら、本編が進まないからです。

一応、バルバドス等神族を崇める「神教」オンリーでいきたいです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6726k/>

堕ちた魔女

2010年10月10日03時57分発行